

沙場を

北へ

オボを越え

マハンを過ぎり

濕原を涉つて

遠く地平の涯

齊克の大穀倉

呼海の重黒土帯に

到達し

更に北方

西比利亞松の林相杳か彼方

極光逆巻く

凍土フンドの上に

すさまじくも

今

縦深ある巨大な豫想戦場を

頻りに意欲して歇まないのだ。

* 東印度會社風といふことに就いて

東印度會社〔英〕East India Company.

近世初頭、英吉利が東亞經略の目的を以て設立した特許會社。

その最盛期に於ては獨占會社から政治的主權者の地位に君臨し、英國の印度經營に貢獻した。

今日の史觀は、東印度會社を米英的な侵略主義の陣營として取扱つてゐる。

このことは正しい。

併し、南滿洲鐵道がその草創期に方つて、經營方針の一斑を英吉利東印度會社の組織に採用したことは明白な史實である。

仍ち明治三十七年、當時煙臺に駐屯越冬中であつた滿洲軍總司令部に於て、時の總參謀長兒玉源太郎大將が、兵馬倥傯の際に早くも戦後の鐵道經營に着眼し、麾下の軍囑託上田恭輔氏に東印度會社の調査を命じたことは、有名な逸話として戦史に遺つてゐる。

私が本作品に用ひた東印度會社風の植民精神といふことは、この挿話に基いたもので、米英的な理念に據るものではない。

詩集大學の留守 畢

輯 後

總領の一郎は得生れで中學の二年生。下の二郎は一つ
違ひの十三。

今夜、秋ばんだ燈の隈で何か熱心に書物に憑かれてゐる二郎の、あせもをジント油で點描した横顔は、まだどこか稚い佛をのこしてゐて、後期印象派の繪のやうな効果で、なぜか私を愉しい思ひに誘ひます。

その傍で下市口の詩に出てくる長男が、私には最早他國の空である三角函數の計算を一心不亂に稽古してゐます。

この十幾年。

「渴ける神」から指をり數へて、早くも閱した一と昔の歲月。

その間にどれほどの仕事が容赦されたことでせう。

三十代から四十代へ。

半生に近い大陸での生活を閉ぢて、再び久瀾の故山へ。

顧みれば、容易ならぬ變動が自分の上にあります。詩集「大學の留守」は、惟ふにかかる境涯を營爲し來つた一私人の記録として、今日斯くある所以をひとに告げませう。

遮莫、東西の辨へもなく、當時誕生の床にあつた兒の頭で、處女詩集の檢印を急いだ遠い春の日を回想すると、今にして光陰の慌しさ、まこと漏斗の中の酒の思ひです。されば、私は蝶を搏つ年老いた獅子の壯心を傾けて、更に「大學の留守」以後の生涯に處してゆきたいと思ふ。

昭和十七年九月三十日

詩集『亞細亞の鹹湖』

昭和八年
ボン書店

詩集『渴ける神』

昭和八年
椎の木社

出版文協化承認番號
ア 380423



昭和十八年十二月二十五日初版印刷 二千五百部

大學の留守

定価金壹圓五十錢
特別行爲税和當額五錢
合計壹圓五十五錢

著者 安西冬衛

發行者 湯川松次郎

大阪市南區順慶町通一ノ五三

印刷所 井下書籍印刷所

大阪市西區阿波〇中通二ノ四
(西大三五)

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

發行所 株式會社 湯川弘文社

大阪市南區順慶町通一ノ五三
振替口〇大阪 七二九七番
會員番號・一三七五〇一號

新詩叢書



詩人のこのたびの大戦にいちはやく感應してその筆を鋭くせる、他の文藝分野にその比をみず。又その朗讀の氣運大いに世に起りて詩集の翹望せらるる今に優る時なし。ここに本邦中堅詩人の詩集を蒐めて新詩叢書となす。

B6判奥紙上製本・題價各冊壹圓五拾錢

湯川弘文社

大阪府大阪市南區東區一丁目一五番七
 大阪府大阪市南區東區一丁目一五番七

- 竹村俊郎 龜草
- 岩佐東一郎 二十四時
- 城 左門 秋風秘抄
- 笹澤美明 海市帖
- 小野十三郎 風景詩抄
- 岡崎清一郎 夏館

- 安藤一郎 靜かなる炎
- 村野四郎 珊瑚の鞭
- 阪本越郎 益良夫
- 津村信夫 或る遍歴から
- 竹中 郁 龍骨
- 安西冬衛 大學の留守
- 中山省三郎 豹紋蝶
- 近藤 東 紙ノ薔薇
- 田中冬二 菽麥集
- 藏原伸二郎 天日の子ら
- 福原 清 催眠歌

965
2

終

